

平成24年度第4回北上市政策評価委員会会議録（要旨）

【行政評価検証専門部会】

日 時	平成24年 9 月28日（金）午後 1 時～ 5 時
場 所	北上市生涯学習センター
出席者	(1)委員 4名 佐藤徹部会長、岩淵公二委員、高樋さち子委員、和田明子委員__（西出順郎委員は欠席） (2)事務局 (3)担当部課職員
傍聴者	なし

1 議題

- (1) 追加資料説明及び担当部再質疑（案件1・2）
- (2) 各委員の評価内容の確認（案件3・4）

	対象案件
1	施策及び事務事業 ごみの発生抑制について
2	重要課題 九年橋大規模改修事業の事前評価について
3	施策及び事務事業 活気ある商工業の振興について
4	施策及び事務事業 農産品の高付加価値化と新たな流通の開拓について

2 会議の概要及び主な意見等

案件 1 及び 2 について追加資料の説明と再質疑を行い、案件 3 及び 4 については各委員の記載した評価内容の確認と担当部との意見交換を行った。

(1) ごみの発生抑制について

[主な意見等]

- ・行政としての啓発周知活動が不足しているのか、活動はある程度しているけれど浸透していないのか、そうだとすればどこに課題があるのかといったことが議論できると、次のステップに進むための評価になると思う。
- ・集合住宅専用のごみ集積所が出来たことで、集合住宅に住んでいる人たちの認識は、ある程度ごみの分別が進むなど変化するものなのか。  
→集合住宅専用のごみ集積所が出来たことで、地域住民からの苦情は少なくなっているが、集合住宅のごみ集積所のごみの出し方が良くなっている訳ではな

い。「収集できません」という貼り紙の付いたごみが、集積所に山積みになっている場所がかなりある。

・集合住宅の住民は、誘致企業の従業員であったり、あるいは震災復興関係で来ている建設関係者かもしれない。日中にそういった人達に啓発指導しようとしても手段は限られる。むしろ職場に対して啓発活動をお願いするのも一つの方法ではないか。啓発活動の方法について何か考えがあって、今後の取り組みに反映させていく意向があるのであれば記載してはどうか。

→岩手県が「エコ事業所」という取り組みを始めた。市内の事業所に認定を取って頂き、北上市から各事業所を訪ねて社員向けにエコ啓発活動をするというやり方もあり得る。

・北上市内の企業が認定を取ったからといって、北上市内のごみ分別のルールを詳細に把握しているかという点、それは別の問題になる。各事業所に北上市として実施しているごみ減量に向けた取り組みであるとか、ごみをこのように分別して排出してほしいとか、啓発の働きかけを実施していくと効果的ではないか。

・生ごみ処理容器補助金については、財政的に精査した結果として補助金制度が廃止になったという説明があったが、その一方で、今後の方針では「生ごみリサイクルの推進」が挙げられている。今後の展開としては、生ごみコンポスト購入制度をまた復活させていこうという考えか、それとも、生ごみリサイクルの推進に関する新しい事業を実施していこうという考えか。

→全国的には生ごみリサイクルの実践例がいろいろ出てきているので、事例を研究している。コンポストに限らず、違う方法も研究していきたい。

## (2) 九年橋大規模改修事業の事前評価について

[主な意見等]

・多基準分析において、必要性と重要性の合計が40点で、緊急性だけで40点という配点というのは、緊急性の配点が極端に高いように感じる。「必要性がないのに緊急性はある」というのはあり得ない。重要性と緊急性の比較というのはあり得ると思う。しかもその高配点の「緊急性」の評価指標が一つだけなので、その評価指標の点数がそのまま総合点に影響してしまう。

・逆にB/Cによる効率性評価の配点が10点というのは、少ないなという印象はある。

→今回の事業の特徴的なところになるが、橋梁の長寿命化からスタートして、調査の結果、九年橋の損傷の状況がひどいことがわかり、とにかく早く床板を取り換えて安全を確保しなければならない。数量化が難しいところではあるが、配点の重み付けに関するアンケートを書いた方々はそこを重視されたと思う。

・都市計画や道路に関わっている人たちの意見が反映された結果であるように思

う。どの手法が妥当かという専門性の高い選択ではそういった専門家の意見が必要かと思うが、「元々必要だと判断していた」専門家では、必要性には高い関心が向かないのかもしれない。アンケート調査の手法の妥当性についてはそのとおりだと思うが、疑問は残る。

- ・例えば事業仕分けだったら「必要性」ということから議論する。外部の住民の目線で見るときにどうなのか、という話になる。今回採用された多基準分析による手法は、B/Cのような定量的な部分だけでなく定性的な部分も含めた総合評価をするときに使われている。評価者がこういう人たちだった、という前提付きの下でこのような数値だと認識すれば良いかと思う。

- ・今回採用された多基準分析の取り組みは画期的で、大変先進的だと思う。他の市町村ではほとんど事例がないかもしれない。

- ・九年橋改修の件が良いかどうかの評価とは別として、今後もこのような形で、数値を明確にして頂けると判りやすい。

### (3) 活気ある商工業の振興について

[主な意見等]

- ・北上市の事例に限らないことだが、行政ができることにはある程度限りがあり、ショッピングセンターや商店街の方々がどれだけ主体的に取り組みをできるかが重要である。ショッピングセンターでは中心になって引っ張る地元の方がいたということだったが、行政として商店街がそれぞれ主体的に動けるようになるようになるための支援を考える必要がある。

- ・地方都市の空洞化には歯止めがかからず、どこの都市でも同様な問題を抱えている。今回は再開発事業によって活性化している地域があるということで、それらと衰退している地域の振興は同時に別々に進めたいのか、それとも連携してセットで進めるのか改めて考えてほしい。市の予算規模は決まっているので、段階的に企画立案を進める必要がある。総合計画や都市計画に沿った中期的な企画立案を考えて、今年度はここまでといったことを市や商工部の具体案として進めてはどうか。昨今の状況では長期的なプランは難しいかもしれない。

- ・指標については、「商工会議所会員数」は不適切。商工会議所の調査報告は良い資料だったので、これを活用すると成果とフィットした指標になるのではないかと。また、「空き店舗率」についても指標として入れてはどうか。

- ・事務事業評価については、具体的に補助金がどのように使われているのかを記載してほしい。また、補助金に限らず、他の事務事業と重複がないかどうか確認をしてほしい。補助金の具体的な使われ方の内容を明らかにすることで、その重複を避けられる。また、補助金の内容を明らかにすることは単年度事業、継続していく中期的事業がうまく事後評価に反映できるようになるので重要である。

・事務事業評価「商店街振興事業補助金」については、「成果の定義」に「売上が増加すること」と書かれているが、その成果指標は「小売店舗数」となっている。成果として「売上が増加すること」とするのであれば「売上額」という成果指標を出すべきではないか。

・事務事業の改善に関する意見として、実施していることが本当に成果達成のために寄与しているのかどうか貢献度の検証が必要だと考える。

・事務事業では、補助金の受給者が毎年同じような団体で、同じような事業を行うのであれば、慣れ合い体質を生みかねない。補助金の上限を例えば40万円ではなく80万円に引き上げて、一定規模のユニークな事業ができるようにするために受給者は絞り込み、競争的な提案公募型補助事業に転換してはどうか。

・商業ビジョンを現在策定しているとのことだが、それ以前に策定し、現在も計画が生きている「中心市街地活性化基本計画」がある。その中で様々な問題、課題があり、それを解決しようとしてきたけれども、なお積み残された課題があるのではないか。それらをしっかり評価、反省して、そのうえで行政としての政策目標を設定し、その次の段階としての商業ビジョンにつなげていく。そういう流れを記述するとなお良くなるのではないか。

・計画を実行段階に移していくことによって目標が達成されているのかどうかを検証、評価できる仕組みが必要。ちょうど計画の大きな改定時期に当たっているので、そういった視点も入れてはどうか。分野別の計画は、総合計画と違って進捗管理や評価がなされていないものが多いので、そこをちゃんと検証すれば軌道修正を図れるのではないか。

・今後の市としてのビジョンが明確になったうえで、地域ごとに適切な事業が行われているのか、ビジョンと整合性が取れているのかどうか議論になる。人口減に関連して最近「縮小都市」という言い方がされている。都市全体でもそうだし、都市の中の地域ごとでもそういう傾向がある。そういう中で商業振興の位置付けが明確になったうえで、個別事務事業をどうリンクさせていくのかという話になる。

・事務事業の指標がそのまま施策の指標になるという関連付けになっているが、事務事業を実施した効果が施策の成果として影響が出るまでタイムラグがあり得る。それを把握するための手段がほしい。商業ビジョン策定委員会では施策の評価という観点からしても御議論頂いたら良いのではないか。これは全ての施策について言えることであるが、特に商業では影響があると思う。

・ビジネスモデルに対する助成金という支援策は考えた方がよい。その地域が目指す地域づくりのあり方に沿った形のビジネスモデルがあって、それに対してある程度活動が促進されるようなまとまった金額を支援する。補助という方法もあるだろうし、低利融資という方法もあり得る。そこから持続的に生産性が上ると

いう観点からの支援のあり方が良い。

・消費者の視点の中には高齢者の視点も入ってくると思うので、ソフトとしての商業施策については商工部だけでなく、内部では保健福祉部だったり、外部としては社会福祉協議会との連携が必要になる。まちづくりにはハードに関する面もあるので建築部との関わりもあるし、観光・産業団体との連携も求められる。総合的な政策が求められる典型だと思うので、そういうところを反映させた商業ビジョンであるよう期待している。

・高齢者には街なかをどんどん歩いてもらい、買い物をしてほしい。道路のバリアフリー化は建設部になると思うが、街なかでの買い物を促すための取り組みということで検討してほしい。北上駅前に立派な地下道があるが、あまり使われていないようだ。まずは北上駅前からでも横断歩道にするなど段差を解消して、高齢者が歩きやすくしてほしい。

#### (4) 農産品の高付加価値化と新たな流通の開拓について

[主な意見等]

・現地視察したところでは、生産者側にやる気があり創意工夫しているところが成功していると感じた。生産者のやる気等を引き出すための行政支援が大切だろう。具体的にどのような支援方法になるかは今後の課題である。

・事務事業評価においては、この事業が必要なのか、成果の向上に寄与しているのかという観点から見直しが必要。

・市の施策、事務事業の貢献度が低いものは見直す必要があるが、農業分野の事業は成果があがるまでタイムラグが非常に大きい。補助金を入れたからといって、すぐに効果が現れるものではない。中期的な計画を立てて、段階を踏んで政策を考えること。事務事業の全般について、事業の選択と集中をしてほしい。重複している事業も多いと思われるので、事業や補助金について見直しのこと。

・市内の流通量を増やしたいという議論があったので、「市内の消費量」という指標の方が良い。また、「全国的な認知度」という指標はどうか。

・「主要産地直売所販売額（年額）」は施策の指標として適切かどうか疑問を感じた。また、施策名には「高付加価値化」と並んで「新たな流通の開拓」が挙げられている。これに対しての直接的な成果指標が見当たらない。農産物販路拡大推進事業の中で「新たに開拓された販路の数」という指標が出てくるので、こちらを採用してほしい。

・全国的な知名度が向上することで北上市内の消費も拡大していくのだろうと思う。北上市内での消費拡大は、全国での知名度向上には必ずしも結び付かず、地元で簡単に食べられるようだと、ブランド力としては低下する。地域外における消費拡大や、地域外からの集客による消費拡大など戦略的な施策展開が求められる。

る。観光担当部署との連携による相乗効果を期待する。

- ・畜産農家やサトイモ生産農家が減っている現況と、「ブランドアップ」「販路開拓」という施策がどのように整合性が取れているのか。北上市内で売るにしても、市外で売るにしても一定の供給量は必要になる。ブランドが有名になって大量に発注があっても、供給できなければマイナスイメージになる。そういうことを考慮すると、「二子さといも」「きたかみ牛」というのは、あくまで北上市の農産物のイメージを向上させるための旗艦的な位置づけになるかと思う。そう考えると、きたかみ牛を使っている店というよりも、賞を受賞するという押し出し方が望ましいのではないか。供給できる量との関係の中での位置付けが必要だろう。

- ・施策構成事務事業の一覧では各種負担金が多く、それらの貢献度が高いのが気になった。「きたかみ牛」の種の開発等に必要だということかと考えるが、負担金や協議会と施策の具体的な関係が理解できる評価シートだと良かった。第三者的に分かりやすいシートにしてほしい。

- ・内に対する事業と外に対する事業と両方の事業を組み立てないと、この施策の目的である「高付加価値化と新たな流通の開拓」が実現できない。前提条件となることの表現についてもう少し工夫があると、評価シートを読んだときに今実施している事業との整合性が理解できると思う。

- ・「きたかみ牛」と「北上牛」のブランド名の統一について話し合いをしているとのことだが、名称は生産者側で決めず、流通側、販売側の意見を聞いた方が良い。ブランド効果を狙う以上は、購入者側の視点を考慮する必要がある。「さといも」は平仮名で違和感ないが、「きたかみ」は地名なので消費者の受け取り方に配慮すべき。

- ・事務事業評価の「有効性」と施策評価の「貢献度」は直接リンクしているものではないとすると、事業の効果はあまり出なかったが貢献度は高かったという評価もあり得るし、逆に、事業の効果は高かったが貢献度は低かったという評価もあり得る。本来的には、そのような状況はあまり想定できない。